

保育実習 I（保育所）における実習学生と園児との関わり

—自由遊びでの能動的・受動的関わりの頻度とそのパターン—

A relation with training students in childcare training I (day nursery) and infants

— The frequency of the relation of the active passiveness by the play free to do relation with training students in childcare training and infants and the patterns —

次世代教育学部乳幼児教育学科

古田 康生

FURUTA, Yasuo

Department of Early Childhood Education

Faculty of Education for Future Generations

キーワード：保育実習 I（保育所）関わり項目と頻度 関わりパターン

Abstract : The aim of this study was to research about childcare training student's relations with infants at the Free Play Times. Relations were passively divided with active. As a result, the following became clear.

1. There is more frequency of passive relation with infants about this study's training students .
2. The frequency of the play item with movement is less than that of play with a little movement.
3. In play with movement, there were a lot of rule explanations and was a lot of frequency of kakekko(tag) without the necessity.
4. It was related. the division of the relations pattern of the movement play into four and There was bias in the entire practice student

Keywords : childcare training I (day nursery) frequency and items of relation relation pattarn

はじめに

保育士養成施設にて所定の科目を履修して保育士資格を取得するには保育実習 I（保育所）（以下、保育所実習とする。なお、本研究では保育所実習とするが保育実習 II とは区別する。）が必修である。保育所実習は、おおよそ10日間あり、「観察実習」が主目的ではあるが、実習する保育所（以下、実習園とする）によりその実習内容は多少の違いがある。現在では、多くの実習園で乳幼児（以下園児とする）と関わる機会をより多く提供していただき、大多数の実習学生は参加実習や部分的な指導実習の機会を与えていただいている。

園児との関わりの中で最も頻繁に行われるものの一つに、「自由遊びの時間帯の運動遊び」がある。

黒岩は、教育実習（幼稚園）（黒岩，2003）と保育所実習（黒岩，2000）における保育及び幼児教育を専

攻する学生（以下、保育学生とする）の運動遊びによる園児との関わりについての詳細な調査・分析結果を報告している。それによると、教育実習（幼稚園）における自由記述により得られた遊び内容では、「学生が子どもと伴って遊んだ遊び」では、すべり台や雲梯、ぶらんこ、鉄棒といった固定遊具が上位となり、じゃんけんや鬼ごっこ系の遊びは下位でとなった。一方、「学生が誘って遊んだ遊び」では、砂場が最も多く、次いで鬼ごっこや小型遊具、固定遊具といった遊びが多くなる結果となった、と報告している。また、保育所実習では、鬼ごっこ（色つき鬼、高鬼、桃太郎鬼、氷鬼、フルーツ鬼 等）が最も多く、次いで、ボールを使った遊び、固定遊具、プールや川での遊び、フープ（輪）を使った遊びの順であった、と報告している。また、佐伯ら（佐伯ら，1992）も教育実習（幼稚園）での園児との関わり遊びで最も多い回答は固定遊具であると報告している。

これらの佐伯や黒岩の一連の研究は、単に保育所や幼稚園での実習における遊び内容を調査するにとどまらず、保育士養成校のカリキュラムにおける「基礎技能（体育）」に関する授業内容がどの程度まで保育所実習にて実践できているかを明らかにしようとしている点に意義がある。すなわち、これらの研究は、保育所実習に参加する保育学生（以下、実習学生とする）の園児との関わり方（頻度や内容）を調査することは、実習に至るまでの保育士養成校での日々の授業内容がどの程度まで学生が理解できているか、身に付けられているかを把握する一つの目安となると報告している。

今回調査対象となった実習学生が在籍するH短期大学保育学科（福岡県北九州市）では、平成21年度の運動遊び関連授業（1年次通年授業）においてボール遊びと鬼ごっこの「体験」と「部分的模擬指導」を繰り返し実践した。それは、現在の保育学生が伝承的な遊びの体験が乏しく（古田，2010）、日常的に乳幼児に接する機会が少ないことを考慮したためである。この授業実践の効果を検証するためには、園児との関わり頻度や遊びによる関わり方のパターンを分析する必要がある。

I 研究の目的

本研究では運動遊び関連授業の実践内容（授業内容とその運営方法）の効果を検証するため、保育所実習における実習学生の園児との運動遊びの関わり方を「遊び項目とその頻度」、「関わりパターン」により検討することを目的とした。得られた結果は、今後の授業の運営に役立て、実習学生が前向きで意欲的な姿勢で取り組めるようにするための基礎的資料とする。

II 研究の方法

1) 調査対象

H短期大学保育学科1年次学生111名とした。調査を開始するにあたり、調査の主旨、調査方法、結果の公表、分析結果の活用方法、そして回答することによって生じる不利益を口頭と文書により説明した後、同意が得られた者のみ質問紙を配布して調査を実施した。

2) 調査期間

全ての調査は、平成22年1月25日から30日に実施した。この期間は、保育所実習が終了した翌週であり、

調査の全てがこと期間内に実施された。

3) 調査方法

質問紙法により保育所実習での園児との関わり内容を能動的・受動的に大きく二分し、実践した活動（遊び）項目を記述させた。調査対象となる園児との関わり方の時間帯は「園児が登園してから降園までの全ての時間帯」とし、全て自由遊びの時間における関わりとした。調査は、「運動遊び関連授業（以下関連授業とする）」にて実施し、質問紙を配布後直ちに記入させその場にて回収した。

4) 運動遊び関連授業

「スポーツ健康理論・実技」（1年次通年科目（授業回数は前後期で各15回））の実施内容を表1に示した。関連授業では、1月の保育所実習を意識して、主に運動遊びの体験と模擬指導とした。実践した運動遊びは鬼ごっこ（追いかっこ、高鬼、色鬼、手つなぎ鬼、十字鬼、尻尾取り鬼等）、ボール遊び（対人パスや投・蹴・転の動作、ドッチボール等）、リレー遊び、はないちもんめやだるまさんが転んだ等の伝承遊びとした。模擬指導とは、各授業にて保育者役に指名された学生が得意とする運動遊びを約20分間にて指導展開するよう構成した。なお、前期は幼児との交流授業にて幼児の運動能力測定が実施されるため「幼児の体力・運動能力テスト」の測定方法の実践的理解の期間とした。

期	前 期	後 期		
授業内容	<ul style="list-style-type: none"> ○球技を中心としたボール遊び、ドッチボール（投げる、蹴る、捕球といった基本的ボール操作技能の獲得） ○鬼ごっこ ○水遊び など ○幼児のための運動能力測定練習 	<ul style="list-style-type: none"> ○伝承遊びの経験 ○多種の鬼ごっこ ○ボール遊び ○学生相互による部分的な模擬指導 <p>【方法】 指名された学生は、得意な遊びを20～30分間の模擬指導をする。役割は、先生役、園児役、観察者 模擬指導終了後に学生観察者により指導展開法や指導内容、立ち位置等の指摘を受ける。 *新型インフルエンザの影響で実技ができないため全員に実施できなかった。</p>	夏季休暇	保育実習11月

表1 運動遊び関連授業の授業内容と流れ

5) 質問紙調査項目

保育所実習での園児との関わりを調査するため、関わり方を「能動的関わり」と「受動的関わり」に二分

して記述させた。なお、本研究では、記述された「園児と一緒に遊んだ項目数」を「関わり頻度数」とした。それは担当クラスの年齢とそのクラスの観察実習日数、クラス方針、同一の遊びを行う頻度といった条件が個々の実習学生により異なるため、今回は記述項目数を「関わり頻度」にする方法を用いた。「能動的関わり」とは、自由遊びの時間において、保育学生自ら園児に関わり実践した遊び項目とした。「受動的関わり」とは、園児から一緒にやろうと誘われたりせがまれたりして実践した遊び項目とした。

6) 統計処理

実習学生の保育所実習での園児との関わり方のパターンを検討するため、クラスター分析法により関わり方を分類した。統計処理はエクセル統計2010を用いた。

Ⅲ 結果と考察

1) 関わり頻度総数の傾向

今回の調査では、能動的な関わり頻度総計は804(0, 1歳児 131・2歳児 133・3歳児 158・4歳児 190・5歳児 192)であり、受動的関わり頻度総計は1632(0, 1歳児 260・2歳児 301・3歳児 347・4歳児 355・

5歳児 369)であった。図1と図2に、実習学生が園児と能動的(図1)、受動的(図2)に関わった動きの少ない遊び項目とその記述数を年齢別に示した。各遊び項目の記述数(頻度)の傾向は、能動的関わりと受動的関わりは類似した傾向を示した。つまり、「ブロック、絵本・紙芝居、ままごと」の3つの遊びは能動的・受動的ともに頻度が多く加齢に伴いその頻度が減少する傾向を示した。また、「お絵描き、カード遊び」は、加齢に伴い頻度が増加する傾向を示した。今回の調査では、身体接触系遊びに「抱っこやおんぶ」といったものを含めた。その結果、受動的関わりとして最も多く、加齢に伴い減少した。しかし、能動的な関わりでは頻度数がほぼ10分の1程度とどまった。

身体接触系の遊びには、「お兄さん回り、ぶらさがりグルグル回り、コアラ抱っこ、地球一周、飛行機」など年齢に応じた様々な遊びがある(前橋, 2005)。しかし、関連授業では一部の遊びの体験にとどめた。それは、保育学生が相互に遊ぶには保育学生自身の体重を考慮すると安全性が確保できないためであった。今回の結果から、受動的関わりで最も多い頻度となったことから今後の関連授業では、安全性を考慮しつつ、工夫して「身体接触系の関わり遊び」が経験できるよう授業内容を改善する必要があると考えられる。

図3と図4に、実習学生が園児と能動的(図3)、

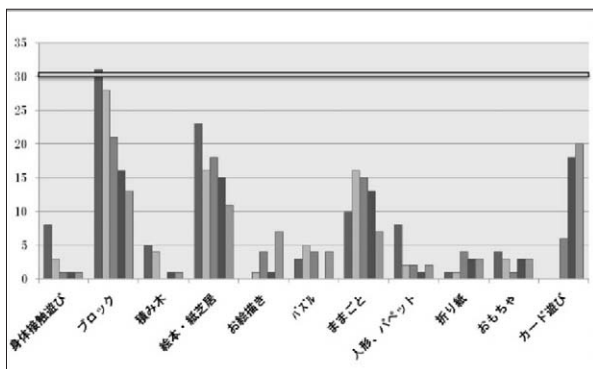


図1 実習学生が能動的に関わった動きの少ない遊び項目と記述数

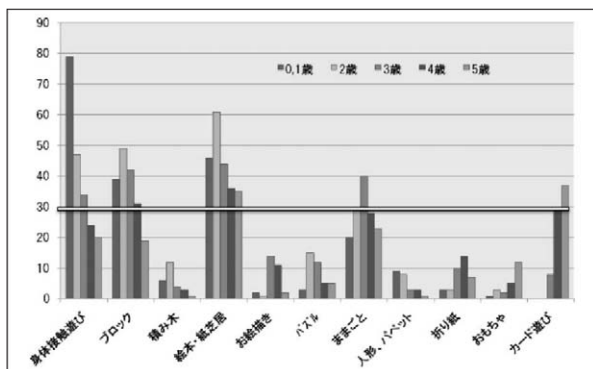


図2 実習学生が受動的に関わった動きの少ない遊び項目と記述数

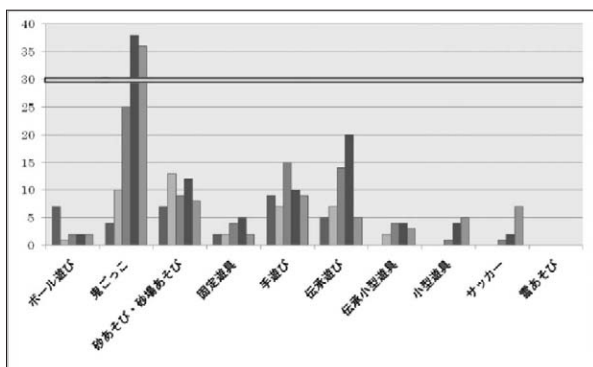


図3 実習学生が能動的に関わった動きのある遊び項目と記述数

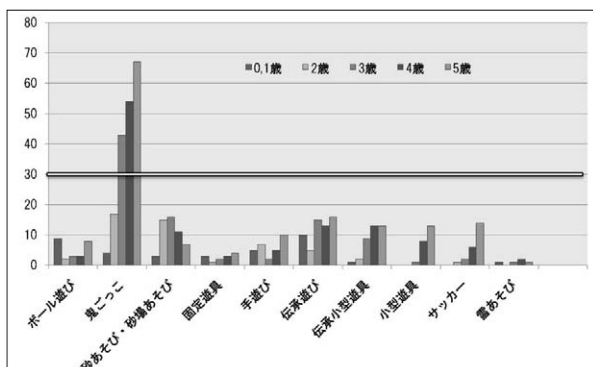


図4 実習学生が受動的に関わった動きのある遊び項目と記述数

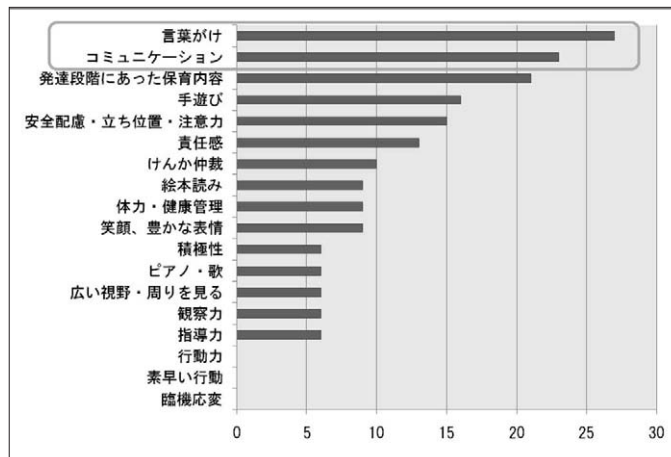


図5 実習学生が今後身に付けたい能力 (自由記述)

受動的 (図4) に関わった動きのある遊び項目とその記述数を年齢別に示した。能動的、受動的関わりともに「鬼ごっこ系遊び」が最も頻度が多く、加齢に伴い増加する傾向を示した。その他の運動遊びの伝承遊びや砂場遊びが多くなったものの、能動的と受動的の両方ともにその頻度は少なかった。つまり、「動きの少ない遊び」主に室内でする遊びと比較すると主に外遊びに属する「動きのある遊び」は受動的・能動的ともに頻度が少ない傾向を示した。この要因には実習学生と園児の双方が外遊びをあまり知らず、体験が不足しているためと推察される。また穂丸ら (穂丸ら, 2007) が全国の保育所での伝承遊びの実施状況を調査した報告では、伝承遊びを保育に導入している施設は99%を超えているものの、20歳代の保育士による実践率は14.5%にすぎないと報告している。このことから、園児自身も伝承的な外遊びを日々実践する機会が少なく、実習学生にせがむ行為が少なかったものと考えられる。よって、比較的単純な追いかけっこを中心とした鬼ごっこに偏ってしまったと考えられる。

動きの少ない遊びと動きのある遊びのどちらも園児の年齢が上がるにつれ関わり項目の頻度が増加していた。つまり、低年齢層では日々同じ遊びが実践され、年齢が上がるにつれ、多様な遊びが実践されるようになる可能性がある。この点は、今後詳細に調査する必要がある。

また、能動的関わり方より受動的関わり方のほうが多い回答を得た。これは、黒岩 (黒岩, 2003) の結果とは異なる結果であった。これらことから今回調査の対象となった実習学生が園児との関わりに消極的傾向があったことが明らかとなった。この要因として、前述の「誘導できる・知っている遊びが少ない」という理由以外に学生のコミュニケーション能力・コミュ

ニケーションの関り方が影響していると考えられる。つまり、実習生が言語に頼った関わりをしている可能性が否定できない。言葉により園児の意図を理解し、実習学生は言葉により意思の伝達ができないと関われないと考えているのではないかと推察される。実習後に調査した「実習学生が今後身に付けたいと思う能力」(図5)ではコミュニケーション能力 (23件)、と声かけ (25件) が上位となった。つまり、実習学生が言語主体により園児とコミュニケーションを図ろうとしており言葉により意思疎通が上手くできない場合が多く、遊びの関わりでは消極的となった可能性がある。このことから、非言語コミュニケーションによる運動遊びの指導法については関連授業の今後の課題の一つといえる。

また、先行研究と関わり方が異なった他の要因として実習園ごとに実習内容が違うことが影響している可能性がある。つまり、観察対象となった園児の年齢(クラス) やその日数が一因として考えられる。

2) 関連授業で主に取り組んだ内容と関わり

関連授業では、実習までの期間に「鬼ごっこ・ボール遊び・伝承遊び」について「体験」と「部分的模擬指導」を中心に実施した。鬼ごっこ (追いかけっこやかけっこを含む) の実践では、半数以上の実習学生が関わっていた (表2)。

表2 鬼ごっこによる園児との能動的・受動的関わりの頻度

	0, 1歳児	2歳児	3歳児	4歳児	5歳児
能動的	4	10	25	38	36
受動的	4	17	43	54	64

(単位は人数)

しかし、高鬼、氷鬼、色鬼、尻尾取り鬼、けいどろ、

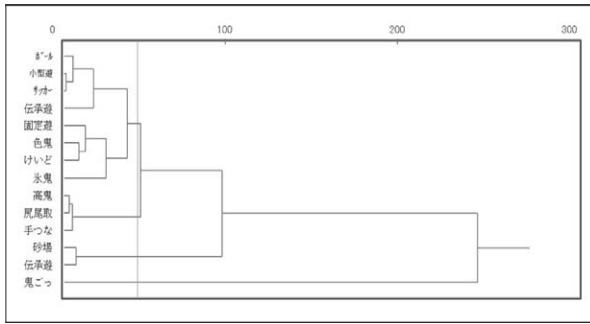


図6 実習学生の外遊び・運動遊びの関わり方

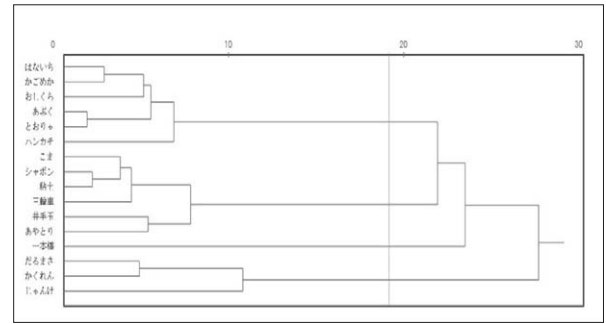


図7 実習学生の伝承遊びの関わり方

手つなぎ鬼，といったルール等の説明が必要な鬼ごっここの実践頻度は4，5歳児のみで実施され，その頻度は約10%程度であった。この傾向は，ボール遊び(サッカーを含む)や伝承的な遊び(だるまさんが転んだ，一本橋，はないちもんめ等)でも同様であった。

これらの結果は，関連授業内容が鬼ごっこ中心であったことが影響している可能性がある。また，現在の保育学生は伝承遊びの経験が乏しく，鬼ごっこであってもその経験している遊び種類は少ない(古田2010)。そのため，関連授業では遊び体験が授業の主体となってしまう十分な部分的な指導の機会が提供できなかったことが影響していると考えられる。

今回得られた保育所実習での運動遊びの実習状況を概観すると，能動的な関わり頻度が少なく，実践できた運動遊びは追いかっこなどの鬼ごっこが多数を占めた。実習期間が平成22年1月の中旬であったことや平成21年度のこの期間(1月中旬から下旬)は新型インフルエンザ等の感染症が流行していたという背景を考慮しても，外遊びでの関わり頻度が少ないと考えられる。これらを考慮すると学生が園児を遊びに誘えなかった要因を調査する必要がある。また，今回は複数回にわたり同じ遊びを実践したとしてもそれを1回とみなした。そのため，各遊び項目についての関わり頻度を再調査する必要がある。

3) 運動遊びの関わり方のパターン

保育所実習において，実習学生が園児とどの様に関わっているかを検討するためクラスター分析法を用いて分析を試みた。運動遊びと代表的な伝承遊びの関わり方を分類した結果(デンドグラム・樹状図)が図6と図7である。

運動遊びでは，5つのパターンに分けられ，つまり①鬼ごっこ(追いかっこ)，②ボール遊び，伝承小型遊具，小型遊具，サッカー遊び，③固定遊具，氷鬼，色鬼，けいどろ，④高鬼，手つなぎ鬼，尻尾取り鬼，

⑤砂場遊び，に分類された。①と③と④は，自分の体を移動させる動作を含む運動遊びであり，身体活動量が多い遊びである。今回の保育所実習で比較的多く実践された遊び項目である。②はボールや遊具を操作する運動である。⑤は比較的的身体活動量が少ない砂場遊びである。本研究で分類された運動遊びのパターンは，幼児の運動遊びにおいて求められるパターンをおおよそ満たしており，対象とした実習が実習学生を全体としてとらえると偏った運動遊びで関わっていなかったといえる。

伝承遊びでは，3つのパターンに分けられ，つまり①はないちもんめ，かごめかごめ，おしくらまんじゅう，あぶくたつた，とおおりゃんせ，ハンカチ落とし，②だるまさんがころんだ，かくれんぼ，じゃんけん，③こま，お手玉，シャボン玉，粘土，三輪車，の3つの関わり方に分類できた。これらの伝承遊びの実施頻度は極めて少ないのが実情である。①は，歌を唄いながらできる遊びで，集団で群れて行うことができ，身体能力だけでなく社会性や協調性をも高めることができる遊びである。②の「だるまさんがころんだ」では鬼への近づき方や姿勢，「かくれんぼ」は隠れる場所や隠れ方，といったように想像性豊かな思考力を育むことができる遊びといえる。③の遊びは，主に手で操作する遊びといえる。これらの遊びは，スポーツ関連・派生する遊びでは経験できない動作や能力の育成が期待できる。そのため，保育学生にとって不可欠な保育教材であり，関連授業にて体験と部分的な指導演習として組み込み，経験を積み重ねることが必要と考えられる。

まとめ

本研究では，保育所実習における保育学生の園児との関わり方や遊び項目を調査することを目的とした。その結果，

- 1 今回調査対象となった実習学生は能動的関わりと比べて受動的関わりが多かった。
- 2 動きのある遊び項目は、動きの少ない遊びより関わり頻度が少なかった。
- 3 受動的な動きの少ない遊びでは身体接触系遊びが最も多く、授業改善が必要である。
- 4 動きのある遊びでは、ルール説明が必要のない追いかけてこの頻度が多かった。
- 5 運動遊びの関わりパターンは、4つに分けられ実習学生全体では、関わる遊びに偏りがなかった。

本論文の内容の一部は、全国保育士養成協議会第49回研究大会（山梨）にて発表した。

参考文献・引用文献

1. 穂丸武臣, 丹羽孝, 勅使千鶴 (2007) 日本における伝承遊び実施状況と保育士者の認識, 名古屋市立大学大学院人間文化研究科人間文化研究, 7, pp.57-78
2. 古田康生 (2010), 保育士養成施設における運動遊び教育の実践に向けて－レクリエーション・インストラクター養成課程認定校での保育・幼児教育を専攻する学生の遊び経験の調査結果－自由時間研究, 36, pp.59-66
3. 黒岩英子 (2000), 教育実習中の屋外での遊びについて, 西南女学院短期大学研究紀要, 47, pp.67-76
4. 黒岩英子 (2003), 保育所実習における運動遊びと短大における体育時の運動遊び, 西南女学院短期大学研究紀要, 49, pp.29-34
5. 前橋明 (2005), 0～5歳児の運動あそび指導百科, ひかりのくに, pp.12-79
6. 佐伯蓉子, 川原弘之, 黒岩英子 (1992) 幼稚園児の自由遊びにおける運動量の検討, 筑紫女学園短期大学紀要, 27, pp.1-10

(平成22年11月19日受理)